

2024 年度 茨城キリスト教大学 FD 報告書

授業改善委員会

(2025 年度)

2025 年 5 月 1 日

学長	東海林 宏司	殿
副学長	池内 耕作	殿
文学研究科長	菅野 弘久	殿
生活科学研究科長	石川 祐一	殿
看護学研究科長	松永 恵	殿
文学部長	岩間 信之	殿
生活科学部長	山中 俊克	殿
看護学部長	栗原 加代	殿
経営学部長	米岡 英治	殿
未来教養学環長	小幡 幸和	殿

授業改善委員会 2024・2025 年度委員長
経営学部経営学科 栗原 正樹

平素より、授業改善委員会活動にご理解とご尽力賜り感謝申し上げます。本学「授業改善委員会規程」第 3 条の 4) により、2024 年度に行われました授業改善活動について以下のとおりご報告いたします。

- I 授業改善委員会（全学 FD）
- II 文学研究科
- III 文学部
 - ・現代英語学科
 - ・児童教育学科
 - ・文化交流学科
- IV 生活科学研究科
 - ・食物健康科学専攻
 - ・心理学専攻
- V 生活科学部
 - ・心理福祉学科
 - ・食物健康科学科
- VI 看護学研究科
- VII 看護学部
 - ・看護学科
- VIII 経営学部
 - ・経営学科
- IX 未来教養学環

I 授業改善委員会（全学 FD）

1, テーマ

「大学全体の教育成果マネジメントと教員の役割― 自主規制制度の視点から ―」

2, 日時・場所

日時：2024 年 11 月 19 日（火）14 時 30 分～15 時 30 分

場所：ハイブリッド開催

リアル会場：8101 教室

オンライン：Microsoft Teams

参加者 60 名

3, 講師

授業改善委員会委員長 栗原 正樹（経営学部 准教授）

4, 研修の目的

本研修は、大学全体として教育の質保証および教育成果をどのようにマネジメントしていくべきかについて理解を深めるとともに、その中で教員一人ひとりが果たす役割を「自主規制制度」という視点から整理することを目的として企画・実施した。学校教育法第 109 条に基づき、大学には教育研究水準の向上を目的として、自ら点検・評価を行い、その結果を公表することが求められており、そのための内部質保証制度の構築が不可欠となっている。本研修は、こうした制度的背景を踏まえつつ、日常的な教育実践と大学全体の教育成果マネジメントとの関係を再確認することを狙いとした。

5, 研修内容

本研修では、大学における内部質保証制度の考え方を整理したうえで、授業評価アンケートがその中で果たす役割について検討を行った。まず、大学教育の質は外部から完全に評価することが難しいという特性を有しており、そのため専門職集団である教員自身が、自律的に教育の質を管理・改善していく「自主規制」の仕組みが重要であることが示された。

次に、本学において実施されている授業評価アンケートを、単なる満足度調査や形式的な制度対応として捉えるのではなく、大学全体の教育成果マネジメントを支える一要素として位置づける視点が提示された。授業評価アンケートは、個々の教員の授業改善に資するだけでなく、大学として教育の成果や課題を把握するための重要な情報基盤となり得ることが強調された。

また、本研修は「こうすればよい」という最終的な結論を提示することを目的とするものではなく、大学教育をめぐるさまざまな視点や論点を共有し、教員一人ひとりが自ら考えるきっかけを提供する場として構成された。その結果として、授業評価アンケートの在り方や

教育成果マネジメントについて、学部・学科を超えた横断的な議論が生まれることへの期待が示された。

6. まとめ

本研修を通じて、教育成果マネジメントは制度として外から与えられるものではなく、教員の専門性と自律性に基づく継続的な取り組みによって初めて実質化されるものであることが再確認された。今後は、大学全体の方針と各教員の授業改善を有機的に接続させながら、内部質保証制度を実効性のあるものとして発展させていくことが求められる。

報告：栗原正樹

II 文学研究科

後期（2月）

題目: Retirement Lecture 「Self-publishing: Educational Materials in the Digital Age」

内容: デジタル時代における教材の自己出版の方法について

講師: 本学現代英学科 教授・大学院部文学研究科 科長 David Yoshiba 氏

日時: 2025 年 2 月 8 日(土)

場所: 11 号館 11203 教室

参加: 現代英語学科 13 名(東海林学長を含む) 100%参加

概要: Yoshiba 先生のご退職に際しての最終講義と重ねる形で現代英語学科主催で実施。

教科書や授業の教材を自己出版という形で出版する方法について、ご自身の Amazon KDP での出版の経験をもとにその工程も含めてお話いただいた。教室内外でテクノロジーを活用した教育実践が求められているデジタル時代の中、どのようにテクノロジーを活用しながら教育者として発展していくかについて考える FD 活動となった。

報告：野田知子

III 文学部

【現代英語学科】

1. 前期（6月-7月）

題目：授業見学・評価・フィードバック

参加：現代英語学科教員 10 名・計 12 コマ参観（東海林学長を除く） - 83%参加

概要：前期開講について現代英語学科専任教員が相互に授業見学を行い、当該の教員間において個人的にフィードバックと建設的批判を目的とする意見交換を行った。

2. 後期（10 月）

題目：特別公開講座「Teaching ESL in California Higher Education：In pursuit of excellence and equity：カリフォルニア州高等教育における ESL 教育について：卓越性と公平性を求めて」

内容：カリフォルニア州高等教育における ESL 教育について

講師：ウェスト大学学長 謝 明華氏

日時：2024 年 10 月 26 日(土)

場所：1 号館 401 教室

参加：現代英語学科教員 11 名（東海林学長を除く）92%参加

概要：大学院文学研究科（英語コミュニケーション専攻）主催の Special Lecture Series と重ねる形で、アメリカ カリフォルニア州にあるウェスト大学の謝明華学長の講演を FD として実施。講演は”Teaching ESL in California Higher Education：In pursuit of excellence and equity：カリフォルニア州高等教育における ESL 教育について：卓越性と公平性を求めて”というタイトルで、アメリカの第二言語としての英語教育事情について謝学長自身の経験を踏まえた講演となった。前半はアメリカの第二言語としての英語教育の歴史や現状、またその公平性などについて、後半は主に受講者からの質問に答える形でお話していただきました。今後ますます多様化する社会の中での英語教育のあり方や異文化理解教育について考える FD 活動となった。

報告：野田知子

【児童教育学科】

令和 7 年 3 月 1 日土曜、13 時より 15 時、柏木智子立命館大学産業社会学部教授・文部科学省中央審議会臨時委員を講師にお迎えし『子どもの学びを支える「ケアする学校」づくり』と題してお話を伺い、大学教員は地域の教育にどのように関わっていったらよいのか考える機会とした。実習園・実習校の先生方に個人としてご参加いただけるよう添付のような文書を実習園・実習校に配布したが、学外からの参加（オンラインも含む）は、幼稚園園長 4 名、中学校教諭（卒業生）1 名、本学兼任講師 2 名であった。

1, はじめに「尊厳の理念の学校カリキュラムへの導入を通じた社会実装の探究」（科研費・学術変革領域研究 A）を進める中で柏木先生と出会い、本 FD 実施に尽力した柳橋晃准教授より、「尊厳」を理念とした教育の改善、教育を通じた「尊厳」の社会実装に関する研究の歴史と現状について説明があった。

2, 柏木智子教授 子どもの学びを支える「ケアする学校」づくり～子どもはケアされながら、自らもケアする人間へと成長してゆく～

大阪大学人間科学部池田寛教授（同和教育）の研究室に所属、松原市のフィールドワークで複雑な現実と直面し、子どもの生活に根ざした現実の見方を身につけるとともに、政策立案の資料になる統計的な分析の必要性も知った。「子どもの貧困」が注目され始めた 2010 年代には、子ども食堂・学習支援活動並びに学校に入り込み、まずは「見せていただく」。困難を抱える子どもたちと出会うが、研究倫理上からも、子どもたちの実態を記すことはできない。実態とドキュメント（統計的な分析）を統合し、子どもの現実を理解する研究法を確立していく。

相対的貧困状態にあるとされる子どもの存在が注目されるようになった 2012 年時点で貧困状態にあるとされた子どもは 19 万 6 千人であるが、「一億総中流」と言われた 1985 年には 20 万 5 千人が相対的貧困状態にあったと統計から読み取ることができる。その時代に子どもであった人たちが、今、親世代になっているが、自身がケアされた経験がないため、子どもをケアするという発想を持てず、養育力不足に陥る。ひとは、ケアされることによって、ケアする力を身に着ける。「ダブルワーク、トリプルワークで疲れ切っている母親に、ノートを買ってほしいと言いだせない、ノートを持たずに学校に行ってもグループ学習に参加できない、勉強にもついていけないし、友だちからも認められない」という自己を肯定し得ない状態に恒常的に置かれた子どもは、どう声を上げていいのか分からない「声の剥奪状態」に陥り、「死ぬ」という選択肢を取る決断力さえ失って「消えたい」と言う。貧困とは、このような「物質的・文化的・関係的剥奪状態」であり、子どもが健やかに育つためには、社会が剥奪を予防し・抑制することが必要である。

子どもの貧困とは、「子どもがその所属する社会で当然とみなされている活動をするための資源を欠き、モノや文化を剥奪され、それゆえに学校で繰り広げられるさまざまな活動への十全なる参加をなしえずに周縁化され、人間としての権利や尊厳およびウェルビーイングを奪われつつある状態」（柏木 2020）と言える。外国ルーツの子どもや、ヤングケアラーも学校という日本社会に参加することに困難があり、声の剥奪状態に陥りやすい。

2014 年に施行、19 年に改正された「こどもの貧困対策推進に関する法律」「子供の貧困対策に関する大綱」を端緒として、2024 年には「こどもの貧困の解消に向けた対策の推進に関する法律」が制定され、子どもの「生」と「学び」を保障する学校、学校をささえる「地域」「社会」の在り方が模索されはじめている。そのためには、特に学校において「皆、同じようにする」形式的平等観から脱却し、個別のニーズに応じ、資源を分配することを基礎とする「公正な平等観」への転換が求められる。ケアとは「自他に関心と共感をもって、自他のニーズに気づき、それに応えようとする応答的活動」（柏木 2020）であって、人権保障のためには「みんなと同じようになれる・できるように」、「みんなと同じように振る舞わなくてもいいように個別に資源を分配して支援」することが必要である。ケアする学校づくりでは「あってはならない差異を埋め」「あってもよい差異をみとめる」ことによって、実質的に学びの機会を保障する。子どもはニーズを充足される客体であるのみならず、人権を保障され、公正で民主的な社会を形成する主体である。ケアする学校では、自他に関心と共感を持って、自他のニーズに気づき、それに応えようとする応答的活動を行う力を養う。教師

には子どもをケアしつつ、ケアする人を生み出すカリキュラムづくりが求められる。

COVID-19 下で ICT 機器を用いての教育活動が促進され、「個別最適化された学び」として「学校」「学び」の在り方に大きな転換が起きようとしている。「多様な社会階層からなるコミュニティ」の形成に寄与してきた「公教育」の消滅によってバウマン（2001=2017）の言う「個の浮遊する分断された社会」が創られる恐れがある。管理統制でも個の放置でもない、教職員・子どもが互に関心を持ち自他のニーズに気づいて応答しあえる「ケアする関係性の構築」を目指す授業を行うことが「公教育」の存在意義となる。ケアする能力を学校だけで育てることは出来ず、地域の人々の関係性が子どもの自己肯定感を育む。『子どもの貧困と「ケアする学校」づくり』で紹介した、「海小学校のカリキュラム」のように子どもが地域の人々と出会う中で、社会の相互依存関係と社会構造問題を把握し、批判的思考を身につけるような授業を行うことができる。どの子も同じスタートラインに立てるような備品（体操服・絵具 etc）の学校への設置、あるいは、自分の思いを書くこと・話すことに困難のある子どもの考えの文字化を助けるタブレット端末の利用、画面上に「考え」を文字として可視化し、他者の反応を受けて自分のコメントを修正していく「公的な意思表示力の習得」など、公的で民主的な社会の主体になるために、地域も含めた「他者と関わり合いながら、共に学び、人間性を涵養していく」ツールとして、ICT の活用を考える必要がある。ケアする学校は、ケアされる側とケアする側の分断があっては成り立たない。〇〇ちゃんが笑顔になると自分もたのしいと思えることでケアする関係が持続する。地域との関係でも、自分の持てる質と量でケアすることでコミュニティー・エスチームが醸成されケアが継続する。公教育の意義は、社会の分断を防ぎ、公正な民主主義社会を形成することにある。幼稚園・保育園でのケアは、声にならない SOS を聞き取り、いかに子どもの思いを汲み取ることができるかがポイント。ひとりでも助けてくれる人がいて、希望を持つことが出来、ケアされた幼児期の経験、人を信頼してみようと思える経験が、生きていく力になる。

参加者の感想

本学教員から

日頃 感じていたことをアカデミックな視点で言語化して伝えてくださってありがとうございました。 ケアする学校の具体的なカリキュラム 授業で取り入れているのか 総合的な学習の時間で行っているのか 先生のケアの視点をどのように醸成するのか、などお伺いしたい事がたくさん出てきました。

幼稚園園長から

* 特別支援学校に進む予定の子どもに、発達支援の必要なお子さんが自然に寄り添って元気をもらっている、お互いの力になっている、園での子どもの様子を思いました。職員間でも、信頼関係を築いていきたいと思っています。

* 園で実践している保育の後押しをしていただきました。人の心を深く読んでいらっしゃるご研究としました。このような学校改革のヒントを頂けるお話を、学校の先生方、教

育行政担当者に聞いていただきたいと思います。もっと、しっかり広報をしていただかないと、せっかくの機会が、もったいないです。

*私自身も、学生時代にゼミの先生に、いきなり同和地区に投げ込まれた経験があり、その強烈な体験がいまの自分の生き方の土台になっております。柏木先生のお話は、私の青春時代を思い出しながら、より共感と未来への希望が持てるお話でした。今回の子どもの学びを支える「ケアする学校」づくりは、そのまま「ケアする幼稚園・保育園・認定こども園・学校」に置き換えて、乳幼児・児童・学生すべての子どもにかかわる者たちが、連携して考え実践していかなければならないことだと思います。社会が便利そしてより機械化されていく中で、コロナ禍も相まって、親に声を聴きとってもらえない、思いが

「声」になるまで待ってもらえないおさなごが増えてきています。そして、残念ながら乳幼児教育・保育の場でも然りです。保育・教育・がサービス化する中、保育者同士の声もなかなか交り合わない・・・等起きています。そうした中で、私の園は、子どもたちと創る保育から、今年度は、子どもの声（声なき声も含め）を聴きとりながら子どもたちの声を響き合わせて子どもとともに保育を創るということで学び合い実践してきております。そうした中で、子どもは元気になります。保育者や多くの保護者の方に声を聴きとってもらえた重ねが、新たな声やことばを生み出し、それはこどもたちだけではなく保護者の方の新たな声をも生み出しているのを実感しております。・・・レジメの中で、公共圏と親密圏のことが書いてありましたが、この図を見ると本来はもっと重なり合って成り立つべく公共圏と親密圏が、離れていることに疑問を持ちました。親密圏の声に公共圏がもっと耳を傾けることで、親密圏はもっと公共圏に声を届けることでもっと重なり合える社会であればと願って、おかれた場でコツコツと実践していきたいとあらためて思いました。ありがとうございました。

報告：原口なおみ

【文化交流学科】

日時：2025 年 1 月 7 日（火）14：30～16：00

場所：茨城キリスト教大学 11 号館 11202 教室

内容：基礎演習の内容改善に向けて

本年度は、外部講師をお招きせず学科教員のみで、学科 1・2 年生必修科目「基礎演習 I ～IV」の内容改善に向けた報告と議論をおこなった。具体的な論点は、次の 2 点である。

1, 1 年次から 4 年次にあがっていく縦のつながり

各学年での段階的な学びの過程が、スムーズにつながっているか。また、より適切につなげていくには何が必要か。（下記、図。当日配布資料より抜粋。）

↑	文化論演習 III、IV さらなる専門的な学びの発展（卒業研究として結実） 文化論演習 I、II	各学年の学びの 有機的な連関
↑	自身が選択した分野の専門的な学び 基礎演習 III、IV	無理のない 飛躍のない
↑	基礎的な学びの発展、文化論演習 I、II へつなげるための 基礎的スキル習得 基礎演習 I、II	学びの配置 カリキュラムの
↑	学科の学びへの理解、初歩的なスキルの習得 基礎演習 III、IV へのつながり	一貫性

2. 同一科目でのクラスどうしの関係

同一科目のそれぞれのクラスにおいて、担当教員の個性や専門性が尊重され反映されるべきだが、各クラスで共通して扱うべき事柄がある。それは何か。（特に「基礎演習 III、IV」。下記、図。当日配布資料より抜粋。）

文化論演習 I～IV 基礎演習 I～IV で習得したことがらを基盤としつつも、 <u>具体的な研究手法は、各分野に委ねられる。教員の専門分野等、各クラスの独自性。</u>
基礎演習 III、IV 教員の専門分野等、各クラスの独自性がある一方で、 <u>3 年次にどのゼミを選んでも対応できるような、あらゆる学問に共通する基礎的なスキルを、各クラス共通して習得する必要がある。</u>
基礎演習 I、II もっとも基本的なことがら。 <u>各クラス共通のことがらを習得。クラスどうしの差異はあまりない。</u> （全クラス共通シラバス、一部合同授業の実施）

FD では、事前に提出された各「基礎演習」の授業報告書をもとに各担当教員が授業の報告をした。その上で、質疑応答、全体討議をおこなった。

<1 年次「基礎演習 I、II」>

内容について、(1)学科の学びの全体像および学科の学びの四本柱（多文化協働、観光、地域貢献、日本語教育）を理解すること、(2)パワーポイントを使って発表すること、(3)文化交流に関する新書を読み要約して、その内容に対する批判的な検証をおこなうレポートを執筆することの 3 点などの知識・スキルの習得をめざしていることが報告された。また、今年度から、近年普及しつつある生成 AI との向き合い方を考えさせる授業を盛り込んだことが報告された。

課題として、BYOD（Bring Your Own Device）にかんして、学生に持参させ授業で使用する電子機器に、どの程度制限をかけるべきかという点が挙げられた（Word、Excel、その他アプリケーションを使いこなせるように、Windows PC に限定すべきかなど）。また、新書要約とレポート執筆において、新書のような平易な文章をまとめる力は身につくが、そこで論じられている社会問題等の背景を理解し、我が事として捉え考えるまでには至っていないのではないかという点が挙げられた。

<2 年次「基礎演習 III、IV」>

担当者によって具体的な内容に違いがあるものの、全員共通して、ある程度専門性の高い図書や論文、芸術作品とその解説などの「インプット」を適切に理解する活動、その上で、「インプット」をもとに、自身の調査結果や考えを「アウトプット」として発表やレポートにまとめる活動がなされていることが報告された。特に「基礎演習 III、IV」では担当教員がそれぞれ独自に工夫を凝らしており、「インプット」の内容に大きな違いがあることが興味深かった。

一方で、学生の興味関心、読解力に違いがあるため、クラス間で「インプット」の内容をどれくらい揃えるべきか、レベルをどれくらい合わせるべきかは難しい問題で、今後も継続して検討すべき課題である。その他、議論に消極的な学生を巻き込んだグループワークの方法や、未知の事柄を探索する楽しさ／難しさ／奥深さをどう伝えるかなどが議論された。

<全体に関わること>

最後に、これは「基礎演習」のみに限らないが、全学生に共通する学科の学びの終着点は何かという問いが挙げられた。文化交流学科は特定の専門職につく学生を教育する学科ではないので、難しい問いである。そもそも「文化交流」とは具体的には何かという問いに等しく、今後、議論を重ねていく必要がある。

むろん、今回 1 回限りの議論で解説策・答えを見いだすことはできないので、今後も同様の場を設け、議論を続ける予定である。

報告：中山健一

IV 生活科学研究科

【食物健康科学専攻】

日時：2025 年 3 月 25 日（火）15 時 30 分～17 時 00 分

場所：7 号館 7101 教室

出席者：専任教員 8 名

テーマ：大学院生の指導・教授法について

実施内容：

近年、大学院生の指導に苦慮しており、退学あるいは希望した修業年限を超過する学生が続いた。そのため、学生の指導法や教授法について、教員の事前アンケートより収集した内容につき、実情を情報共有するとともに得られた課題を検討した。

検討内容：

1) 大学院生の意識に関する内容

大学院生としての意識が低く、学部教育とは違うことを理解できていないとの意見が複数の教員より挙げられた。改善策として、各教員の授業で多くの論文を読む機会を与えること、授業がない日でも毎日大学に登校することなどが挙げられ、学生の意識を高めていくこととなった。

2) 研究指導に関する内容

学生が教員に頼りすぎている部分が多く、①教員に研究の答えを求めること、②資料作成せず、提出期限を守らないため、教員の指導時間が限られること、③研究方法やまとめ方、論文の書き方等のスキルが顕著に不足しているため、一からの指導を要することなど、教員に多くの負担がかかり、疲弊しているとのご意見が挙げられた。改善策は、1) の内容にて学生の意識を高めることとし、また、過去の研究指導方法の例などの情報共有をした。

3) 授業に関する内容

授業の課題を嫌がる、仕事が忙しくて課題が十分にできないなど、様々な意見が得られ、その改善策として、1) と同様の内容で学生の意識を高めることとした。

4) 学生対応に関する内容

教員と学生の 1:1 の関係は、非常に危険であるとの意見が複数の教員より挙げられた。実際、学生より「何か起きた時や相談したい時、どこに相談したらいいかわからない」との情報があつた。解決策としては、学生の声（本専攻以外の教員がいい）から、相談窓口を「学務部学生課」に設定する方向でまとめたが、この案件につき、研究科長より研究科長会議にてご提案をいただくこととなった。

5) その他

新年度より 3 名の入学生がいるため、教員の事前アンケートより早急に検討する必要がある

る内容につき検討した。

① 授業開催について

社会人と学生が在籍していることから、社会人に授業日程を合わせるため、6 時限、7 時限、土曜日に偏るとのご意見が挙がった。改善策として、学生のための授業は、1) の内容より平日に授業日程を組む方向でまとまった。

② 中間発表の開催について

中間発表を半期に 1 度の開催した場合、学生の負担が大きいこと、中間発表の準備に集中して研究が滞ることから、年 1 回の開催案が挙がった。また、研究計画を指導する M1 の中間発表は、9 月に開催した場合、倫理審査申請が終了し、研究計画の指導が難しいことから、5 月頃の開催案が挙がった。これらの案につき、多くのご意見が得られ、まずは、年 2 回の開催（半期に 1 回）は変更せず、1 回目を分野別（5 月または 9 月）、2 回目を全体（3 月）で実施し、今後、様子を見ながら変更するか否かを検討する方向でまとまった。

報告：大貫和恵

【心理学専攻】

1, テーマ

「心理実践実習」を見据えた学部カリキュラムの検討 ―「心理演習」に焦点を当てて―

2, 開催日時・場所

2025 年 2 月 18 日(火)10:00～11:30(6 号館 3 階 6301 教室)

3, 出席者

心理学専攻専任教員 7 名（全員出席）

4, 内容

大学院実習である「心理実践実習」は、学部 4 年間の学びの積み重ねのうえに展開される科目である。「心理実践実習」を履修するにあたって、学生の準備状態を整えるためには、学部の「心理演習（2 年次開講科目）」と「心理実習（3 年次開講科目）」の現状理解と、それら科目と「心理実践実習」との有機的な関連づけへの取り組みが欠かせない。

そこで、今回の FD では、「心理実践実習」「心理実習」「心理演習」の各担当者から学修内容の概要の報告と課題に関する問題提起がなされた。そのうえで、実習演習科目の起点にある「心理演習」の今後の展望について意見交換がなされた。

具体的には、「心理実践実習」については青木先生、「心理実習」については山川先生、「心理演習」については黒澤先生に、担当者を代表して、各科目の内容と課題を報告していただいた。「心理実践実習」に臨むにあたっての学部における学修上の課題として、基

礎的な文章力や内省力の定着、そして職業としての公認心理師への興味・関心の育成が共有された。こうした課題への対処として、まずは入学段階から学生に公認心理師について知る機会を提供するとともに、他の授業科目の意識的活用も視野に入れて基礎力定着を図ることの意義が確認された。

報告：櫻井由美子

V 生活科学部

【心理福祉学科】

1, テーマ

課題の多い学生の現状とその対応について

2, 開催日時・場所

2025 年 2 月 25 日（火）14:00～15:30 （6 号館 301 教室）

3, 出席者

9 名（学科教員 14 名中）

4, 内容

講義科目や演習科目、ゼミ等において、長期欠席、学科の学びや資格取得に対するモチベーションが低く思っていたものと違うなど、さまざまな学生に対しての状況とその対応例についての意見交換を行った。

不安感の強い学生、授業中の出入りが多く、行動が粗暴な学生などさまざまであるが、必要であればカウンセリング研究室に繋ぐことで工夫をされているケースが紹介された。また、チャット GPT とどう向き合うかという課題についても示された。その他、卒業期や学生の将来のことについての対応として、ゼミの単位は取得しているがその他の単位で卒業が叶わなかった学生をゼミ教員が引き続きサポートしているケースも共有された。学生が心理系・福祉系などコース制のように捉えて、どちらかだけを学べば良いと思っているケースもあり、心理と福祉を学ぶ意義も示された。対応として、ゼミ選択も心理と福祉で明確に分離しない方が良いのではないかという意見もあった。

最後に、各教員からの意見交換をもとに、学科としてどのような教育をめざしていくのかも検討していくことが確認された。そして、資格取得をサポートしていく仕組みづくりも必要であることも共有された。

報告：清原舞

【食物健康科学科】

日時：2024 年 12 月 24 日（火） 9 時 30 分～14 時 00 分（全 3 部制）

場所：7 号館 7101 室

出席者：専任教員 12 名

実施目的：2025 年度より開始する新カリの教育内容の検討

- ・ 2023 年度 FD 研修会にて得た課題の検討
- ・ 1 年次、2 年次の開講科目に関する授業内容の確立（シラバス内容も含む）
- ・ 科目間の情報共有
- ・ 栄養計算関係の担当者および教育内容の情報共有
- ・ 実験データと栄養統計処理の関連性
- ・ モデルコアカリキュラム細項目で網羅できているか確認

実施形態：全 3 部制とし、以下の各分野の教員で討議した。

【人体の構造と機能及び疾病の成り立ち＋基礎栄養】

2023 年度の課題：

- ・ 授業の内容・順序性は今後更に検討を進めていく。
- ・ 新たに着任する教員(医師)と要相談・調整。 ※翌年度実施

2024 年度の検討内容：

1. 解剖生理学実験 I および II の授業内容検討（シラバス作成）
 - ・ 解剖生理学実験 I：生体の構造と生理
 - ・ 解剖生理学実験 II：生体の構造と機能
2. 授業内容の精査
 - ・ 生化学実験（DNA、遺伝子発現）と栄養学実験（ビタミン、ミネラル）の内容を精査した。
 - ・ 栄養学実験で消化酵素を実施することとなった。
 - ・ 栄養学実験と運動生理学実験にてエネルギー代謝の実験が重複していたため、調整が必要とのことであった。
3. 今後の課題（実験データが科目間で展開できる授業内容を検討）
 - ・ 解剖生理学実験で安静時の生理指標を測定
 - 運動生理学実験で運動時のデータを測定
 - ・ 解剖生理学実験で 24h 尿より尿中ナトリウム濃度を測定
 - 他の授業で食事調査を実施し、食事内容を踏まえたデータの解釈
 - ・ 血液に関する実験を検討しているが、医師が担当する授業は要検討
 - ・ 咀嚼や感覚機能に関する実験を検討（内容未定）

【実験データに関わる科目】

2023 年度の検討内容：

- ・栄養統計処理では栄養学に必要なと思われる内容を一通り網羅しているため、統計処理が必要な授業で教科書「よくわかる統計学（東京図書）」を持参するとよいのではないか。

2024 年度の検討内容：

1. 栄養統計処理の授業内容検討

- ・新カリでは必修科目になるため、教科書を「よくわかる統計学（東京図書）」に決定した。

2. 実験・実習データと統計処理との関連

- ・統計処理で得た知識を定着させ、理解が深められるようにするため、実験・実習で継続的に活用をしていく。

3. その他

- ・統計学の理論は、教養科目の「はじめての統計学（選択）」で講義しているため、1 年次の履修ガイダンスにて履修するようにアナウンスすることとなった。
- ・数字を使用した統計処理は、公衆栄養学実習で実施しているが、標準偏差などの概念が理解できていない。

4. 今後の課題

- ・学生が苦手なエクセルの知識をどのように習得させるかが課題
- ・統計処理で得た知識を実験・実習でどのように活用をしていくかが課題

【食べ物と健康】

2023 年度の課題：

- ・調理学実習と調理学実験の内容精査

2024 年度の検討内容：

1. 調理学実習と調理学実験の内容精査

- ・調理学実習Ⅰ・Ⅱは、授業回数が 30 回から 24 回へ変更、調理学実験は 15 回から 12 回へ変更になるため、授業内容で重複している部分について見直しをした。
- ・調理学実習と調理学実験で重複している授業内容があるため、開講学年を考慮して授業内容を精査した（下記参照）。

2. 授業内容・科目の調整

- ・計量：調理学実習Ⅰ

現在、調理学実習Ⅰと調理学実験で実施していたため、1 年次開講の調理学実習Ⅰに統一した。

- ・卵の実習：調理学実験、食品加工学実習

現在、調理学実習、調理学実験の 2 回に分けて実施していたが、授業内容を踏まえて、3 年次開講の調理学実験、食品加工学実習に変更した。

- ・調理学実習の授業内容を追加
3. モデルコアカリキュラム細項目について網羅していることを確認した。
 4. 今後の課題
 - ・今後も継続して、科目間の調整が必要

【食品成分表に関わる科目】

2024 年度の検討内容：

1. 食品成分表に関する講義内容等の情報共有
 - ・食品成分表の活用について、講義は調理学、食品学Ⅰ・Ⅱ、栄養素の分析実験は食品学実験、栄養計算は調理学実習で実施していたが、食品加工学では、全く触れていないことが分かった。
2. 食品成分表の活用方法の検討
 - ・食品成分表の知識を定着させるため、食品加工学実習にも栄養計算を取り入れることとした。
例）原材料から加工品になるまでの栄養成分の変化（豆腐、ヨーグルト、マーマレード）
3. 教育内容について担当者を調整
 - ・調理学、食品学の授業で使用する教科書に則って食品成分表の講義内容を担当するが、多少、重複しても可とした。
4. モデルコアカリキュラム細項目について網羅していることを確認した。
5. 今後の課題
 - ・学生は、食品の重量感覚が弱いため、入学前プログラムに課題などを取り入れてもいいのではとの意見が得られた（これまで調理学実験で実施していたが、1年次の調理学実習に変更）

【栄養計算に関わる科目】

2024 年度の検討内容：

1. 食品成分表、食事摂取基準、Excel 栄養くんの授業内容等の情報共有
 - ・食べ物と健康・給食分野；食品成分表
調理学関連：食品構成・番号、食品群別留意点の説明し、実習にて簡単な栄養計算等を実施
食品学関連：栄養素、分析方法の説明し、実験にて食品の栄養成分を分析
給食経営管理関連：献立作成時の栄養計算は食品成分表のアプリを活用
 - ・応用栄養分野：食事摂取基準
アセスメントの際、食事摂取基準の①推奨量を満たす②PFC 比の範囲内に収まるよう指導
高齢期では、飽和脂肪酸、不飽和脂肪酸、n-3 系、n-6 系にも触れて指導

- ・臨床栄養学分野：食品交換表

臨床栄養関連：講義にて食品交換表の活用方法を説明し、実践は実習にて実施

応用臨床栄養関連：クラウド型給食管理システム教育を活用し、システムによる献立作成を実施

- ・公衆栄養学分野：Excel 栄養くん

食物摂取頻度調査票（FFQ）と Excel 栄養くんをリンクさせて使用方法を説明

2. エクセル栄養くんの活用

- ・栄養計算は、1 年次、2 年次で食品成分表のアプリを活用しているが、3 年次以降は Excel 栄養くんや無料ソフトを活用している。
- ・臨地実習先での栄養計算は、Excel 栄養くんを使用していない施設が多いとの情報が得られた。しかし、公衆栄養学実習では、FFQ を使用するため Excel 栄養くんが必要であることから、Excel 栄養くんの使用方法の説明は、引き続き、公衆栄養学実習で実施することに決定した。

3. その他

- ・栄養素の成分値の位取り（成分値の表記）について、調理学や給食実務演習で講義しているが、学生はできていないとの意見が得られた。学生の知識が定着していないため、各科目に継続して指導していく必要がある。

4. 食品成分表、食事摂取基準、Excel 栄養くんの使用説明の担当科目

5. 今後の課題

- ・情報共有はできたが、詳細に検討する時間が足りなかったため、次年度も検討時間が必要

- ・現在、使用している食品成分表の見直し（これまで変更することがなかったため）

【臨地実習に関わる科目】

2023 年度の課題：

- ・実習のスケジュール臨地実習Ⅰ～Ⅴ実習期間が重複するため調整を要する
- ・給食実習における事前指導のタイミング
- ・総合演習Ⅰ、Ⅱの内容の精査が必要

2024 年度の検討内容：

1. 臨地実習の実習時期の検討

- ・臨地実習Ⅰ・Ⅱ：6～7月に実施予定
- ・臨地実習Ⅲ：8～12月中に実施予定

2. 履修人数の調整

- ・臨地実習Ⅱ～Ⅴは、選択制ではあるが、各科目の人数を固定して制限することとした。

- ・履修科目の選定方法は、学生への希望調査アンケートを実施した後、GPA 順で決定することとし、学生には履修ガイダンスでアナウンスすることになった。

3. 総合演習Ⅰ、Ⅱの内容の精査

- ・授業の概略は、事前・事後指導、報告会などを含む全30回を別紙にて決定した。

4. 今後の課題

- ・成績評価について、4年次での成績登録が可能かを学務部に確認
- ・2027年度は、臨地実習Ⅲが現行カリと新カリの2学年が重複するため、対応が必要

【基礎演習】

2023年度の課題

- ・授業内容の精査と標準化

2024年度の検討内容：

1. 授業内容の精査と標準化

- ・1人の教員が1クラス、全15回を担当することとなった。
- ・授業内容は、EQ結果説明、PROG授業、図書館ガイダンス、生物、化学等を入れた内容に決定した（別紙参照）。

2. 成績の評価基準

- ・成績は、レポート課題と授業内の発表内容で評価することとなった。

3. 今後の課題

- ・生成AI（ChatGPT等）について、今後の大学の方針も含めて要検討

報告：大貫和恵

VI 看護学研究科

1 第1回「研究指導補助のあり方をイメージする」

1) 趣旨

2005（平成17）年「新時代の大学院教育—国際的に魅力ある大学院教育の構築に向けて答申」には、円滑な博士学位授与の促進に向け複数の教員から指導を受けるよう示されていた。現在公開されているJANPU（日本看護系大学協議会）の大学院評価基準（試行）にも「学際性を鑑み、複数の教員から指導を受けることができる体制になっているか」という項目がある。

看護系学会協会に登録している学術団体は51あり、研究分野は多様化している。さらに地域医療構想の進展に伴い、複数の分野にまたがる研究もみられる。入学を希望する学生のニーズに応じるには、複数の研究指導教員、研究指導補助教員による指導を検討する必要がある。

しかし、複数指導体制は非効果的であるという意見がみられている。実施するとすれば、研究指導教員と研究指導補助教員が協力して指導できるよう、教員間で共通理解をはかっていく必要があると考えた。

そこで、複数指導体制で研究指導を受けた教員の体験談をもとに、研究指導補助のあり方についてイメージを共有する機会をもった。

2) 日時： 2025 年 3 月 13 日（木）10：30～11：30

3) 会場： 8 号館 8201

4) 参加者：本学教員 20 名

5) 内容

タイムスケジュールは表に示した通りであった。

時刻	内容
10 時 30 分	趣旨説明
10 時 40 分	グループ協議
11 時 10 分	発表
11 時 30 分	終了

スライドを用い、複数指導体制が求められている背景について説明した後、5 人程度のグループを編成し話し合った。なお、研究指導の経験のある教員と、無い教員の考えに大きな差が生じることが予想されたため、1 グループのみ、研究指導経験のある教員だけで編制し、その他のグループは研究指導経験の無い教員で編制した。

6) 成果

発表された意見を、研究指導の経験のある教員のグループ、無いグループに分けて報告する。

(1) 研究指導の経験のある教員によるグループ

- 研究指導教員と同じ分野、または異なる分野の教員が研究指導補助を行う可能性がある
- 論文を執筆した経験のない学生が多いので、研究指導補助教員には、学生が混乱しないように補助してほしい
- 研究指導教員の指導の意図を理解して加わってほしい
- 役割分担を明確にする（例：分析のみ担当する）
- 研究指導教員と学生がうまくいかない時にのみ補助的に指導する

(2) 研究指導の経験が無い教員のグループ

- 研究指導教員と研究指導補助教員の意見が衝突したことで、学生の視野が広がったことがある
- 他分野の研究指導補助教員からの学びは学際的な研究につながる可能性がある（2 グループからの意見）
- 教員同士が垣根を越えて助け合えるようになる
- 同じ分野の研究指導教員、研究指導補助教員に指導を受けた
- 分析については研究指導補助教員が主になり対応してもらったことがある
- 若手の研究指導補助教員には相談しやすい
- 研究指導を補助するなら、研究指導教員の指導から学び、指導力を向上させたい

○ 学生が研究指導教員、研究指導補助教員を選ぶことができた

以上から、研究指導経験の無い教員の方が、研究指導補助に対し肯定的な考えを持っているという印象を受けた。研究指導教員と研究指導補助教員の意見が分かれた場合に、研究指導経験のある教員は「学生が混乱する」と心配し、研究指導経験の無い教員は「視野が広がった」と捉えている。いずれにしても、研究指導教員をリーダーとして、研究指導補助教員が指導の意図を理解し、同じ目標に向かって指導するためのコミュニケーションを大切にする、場合によっては役割分担を明確にするというイメージが共有された。

2 第2回「研究の醍醐味を体験させる教育—文献レビューの指導を中心に—」

1) 趣旨

量的研究、質的研究にくらべ、文献研究の指導方法に関しては書籍が少なく、教員の経験に依存するところが多い。そこで、数少ない文献研究の指導方法に関するわかりやすい書籍を出版した著者を講師に迎え、日頃の文献研究の指導、特に文献統合を中心に学びたいと考えた。

2) 日時：2025年3月15日（土）14～16時

3) 会場：8号館8102教室（オンライン併用）

4) 講師：京都大学大学院医学研究科先端基盤看護科学講座生活看護学分野教授
若村 智子 先生（オンラインで講義）

5) 参加者：57名（看護学部教員24名、他学部教員2名、修了生3名、看護専門学校27名、地域の看護職者3名）

6) 内容

事前に著書（「はじめて学ぶ文献レビュー」総合医学社）を読み、参加するよう周知した。

日頃のゼミの様子を交えながら、テキストの内容に沿った説明（文献とは、要旨を読む、リサーチクエスチョンを設定する、文献を検索する、整理する、統合する）が行われた後、質疑応答が行われた。

7) 成果

事前には教員にアンケートをとり、指導に困ることを集計して伝えていたが、全般的にはテキストをなぞった講演になってしまった。特にご説明いただいたかった文献統合について具体的な説明が不足し、参加者の期待に応えられなかったのではないかと思います。

事後アンケートにより、成果を感じた参加者がいたことがわかったが、回収率は33%と低く、参加者全体の思いを汲み取った結果とはいえない。

講師は当初、来学する予定であったが、都合によりオンラインによる講義となったことも、意志疎通の難しさを感じる一因となったのではないかと思います。

＜事後アンケート結果より一部抜粋＞

1. 研究や研究指導への意欲の高まり

高まった 9 名 (50%) やや高まった 7 名 (38.8%) あまりそう思わない 2 名 (11.1%)

2. 講演内容

適切 7 名 (38.9%) やや適切 7 名 (38.9%) あまり適切ではない 4 名 (22.2%)

3. 講師

適切 11 名 (61.1%) やや適切 4 名 (22.2%) あまり適切ではない 3 名 (16.7%)

4. 自由記述 (カテゴリー化した名称のみ掲載)

【新たな学びと文献レビューの重要性の再認識】

【学生指導において取り組みたいこと】

【講師の人柄が伝わってきた】

【講師のゼミ回数に感服】

【学生のレディネス格差を実感】

【期待していた講話内容との違い】

3 今後の FD の方向性

この数年、講師を依頼した FD と、研究科の実態に即したディスカッション中心の FD の 2 種類を実施してきた。前者については、研究指導に関する講演を継続してきた成果が得られてきている。本年度に関していえば、恐々と実施してきた後者の FD の方が充実感を得られているように思えた。今後数年で急激に世代交代が進行することが予想されている中、分野や職位にかかわらず、よりよい教育を目指して意見を表明し、共有する取り組むは重要である。今後も、身近に感じている課題の解決を目指すようなテーマを設定し、ディスカッションを継続していきたい。

他学部他部署においてはオンラインによる FD も行われているが、第 2 回の FD の経験から、対話を重要視する本研究科の教員を対象とした FD においては、対面による講義の方が成果を得やすいように感じた。講師の選定にあたっては、対面による実施を条件にし、調整にあたりたい。

報告：松永恵

VI 看護学部

【看護学科】

1, テーマ

看護職としてのキャリアの構築

ー学生のキャリア形成を支援するために教員としてできることー

2, 趣旨

看護職者として成長するためには看護職の継続が必要であるが(グレッグ他, 2003)、2023年の病院看護実態調査の結果によれば、新卒看護職員の離職率は 10.2%と高止まりしている(日本看護協会, 2024)。キャリア発達に向けて、看護基礎教育課程から支援の充実が求められている。

看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標(日本看護系大学協議会, 2018)によれば、専門職として研鑽し続ける基本能力の中に「生涯にわたり継続して専門的能力を向上させる能力」、「看護専門職としての価値と専門性を発展させる能力」という2つのコアコンピテンシーが設定された。これに対し、国内の看護系大学におけるキャリア教育の実践を概観すると、教育目標として、主体的にキャリアを形成できることや、将来のキャリアデザインを設計できることを目標としている教育が多く、ポートフォリオやキャリアシートの活用、看護職者の体験談を聞く機会を積極的に設けている(佐藤他, 2024)。

以上より、2024年度のFD研修は、本学のキャリア支援の現状と課題および他大学のキャリア支援の実践を学び、学生のキャリア形成を支援するために教員としてできることは何かを考える機会とする。

3, 目的

本学のキャリア支援の現状と課題および他大学のキャリア支援の実践を学び、学生のキャリア形成を支援するために教員としてできることは何かを考える。

4, 研修の概要

1) 日時 2025年3月14日(金) 14:00~16:00

2) 場所 8201 教室

3) 参加者 看護学科教員 27 名

4) プログラム

時間	内容
14:00	開会の挨拶 学部長 栗原 加代 先生
14:10~14:25 (15分)	本学のキャリア支援の現状と課題 キャリア支援委員会 若林 千津子 先生
14:25~14:40 (15分)	他大学のキャリア支援の実践 授業改善委員会 眞崎 由香
14:40~15:30 (50分)	グループワーク ①学生はどのようにキャリアデザインをつくり上げているか ②教員はどのように学生のキャリア形成を支援しているか ③今後、教員はどのように学生のキャリア形成を支援していくことができるか
15:30~15:50 (20分)	発表・共有
15:50	閉会の挨拶 学科主任 池袋 昌子 先生

5、プログラム内容の概要

1) 本学のキャリア支援の現状と課題（概要）

(1) キャリア支援センターによるサポートの概要

①1・2 年次

1 年次前期：EQI®（EQ 行動特性検査）

1 年次前期・3 年次後期：PROG 基礎力測定テスト（リアセック社）

2 年次から：外部による合同就職説明会の周知・参加勧奨

②3 年次から

3 年次から：IC-NAVI の利用

3 年次前期：学科別就職説明会

4 年次：個人へのサポート（個別面談、履歴書・エントリーシートの書き方指導、
小論文の添削、模擬面接、集団討論の練習会）

卒業生：就職指導・就職相談

(2) 2024 年度 卒業生(83 名)の就職活動の概要

①進路状況（2025 年 3 月 10 日現在）

就職：80 名

<内訳>

看護師：77 名（県内：56 名、県外：21 名）

保健師：3 名（県内：3 名）

進学（助産師）：2 名

講師登録（養護教諭）：1 名

②内定者数が多い医療機関

<県内>

株式会社日立製作所 日立総合病院：9 名

筑波大学附属病院：7 名

日本赤十字社 水戸赤十字病院：6 名

公益財団法人筑波メディカルセンター 筑波メディカルセンター病院：5 名

<県外>

医療法人徳洲会 千葉西総合病院：6 名

③月別内定者数

4 月：2 名 5 月：12 名 6 月：34 名 7 月：9 名 8 月：16 名 9 月：2 名

10 月：2 名 11 月：3 名

⇒全体的に就職試験の時期が早まっている傾向にある。

④希望機関への内定者数

第一希望：70 名 第二希望：8 名 第三希望：1 名 第四希望：1 名

(3) キャリア支援に関する要望 -卒業生アンケートから-

①調査の概要

調査目的：卒業生の就業状況や大学への要望を明らかにし、キャリア形成支援、
卒業生と連携した教育について検討

調査対象：看護学部看護学科卒業生 第 1～16 回生

調査期間：2023 年 9 月～10 月

②調査対象者数・回収率

卒業生数：1,346 名 対象者数：1,014 名 回答数：181 部 回収率：17.9%

現在の就業状況：就業している 163 名 (90.1%)

現在の就業職種：看護師 121 名 (74.3%)

保健師 25 名/助産師 10 名/養護教諭 7 名

今後も看護職・養護教諭として働きたいか：そう思う 149 名 (91.4%)

自己研鑽やキャリアアップの状況：勤務先の研修・訓練などの受講、参加 (78.5%) が最多

将来構想：現在の専門職の専門性を向上させ実践力を高めたい (55.7%) が最多
本学でもっと学びたかった教育内容：

看護に関する技術 (54.1%) が最多

自由回答では、「キャリア形成やキャリアデザインについて学びたかった」などが挙げられた。

本学に期待する支援：

公開講座・研修会の開催 (32.0%)、図書館の開放 (32.0%) が最多

自由回答では、【卒業生や教員との交流の機会】などが求められていた。

(4) キャリア支援における課題

就職活動への支援として、3 年次後期の段階で進路を視野に入れた支援、アドバイザー教員と共に、今後の方向性を検討する機会の設定が必要ではないか。

2) 他大学のキャリア支援の実践 (概要)

(1) 看護基礎教育におけるキャリア教育の重要性

先行研究を概観すると、近年、新人看護師および中堅看護師の離職の多さが問題視されている。よって、看護基礎教育課程からキャリア形成の基盤づくりとなる教育的な介入をしていく必要がある。

では、国内の看護系大学ではどのようなキャリア教育の実践があるかを文献から読み取ることとした。

本報告では、2013 年から 2024 年に発行された 5 本の文献の実践例を取り上げた。

(2) 教育目標

国内の看護系大学では、主体的にキャリアを形成できること、将来のキャリアデザインを設計できること、キャリアデザインを描く上で必要な自己理解を深めること、専門職業人としての態度や深い思考力を育成することなどが教育目標として挙げられている。

(3) 教育方法

国内の看護系大学では、定期的なキャリアガイダンス、個人面談や個別指導、キャリアポートフォリオの活用、キャリアデザインシートの作成、自己理解・他者理解を促進するためのグループワーク、体験談を聞く機会や講演会（看護職者・看護部長・卒業生など）、卒後教育などが行われている。

① ゼミ担当によるキャリア教育

学生のキャリア志向を確認することや志望施設の選定の相談、希望する病院施設の機能および専門分野に特化した履歴書作成の個別指導、採用試験（面接・小論文など）の個別指導などが行われていた。ここでは、キャリア支援担当教員や学生課との協働による学生支援が展開されていた。

② キャリア支援担当教員によるキャリア教育

4年間のキャリア支援計画が立てられ、自己理解・仕事理解から啓発的経験（実習やインターン、説明会など）を積み、意思決定・方策の実行（就職支援など）ができるよう支援していた。

③ キャリアポートフォリオ

1年次4月に入学した理由と卒業時の自分を記述し、科目で活用するとともにキャリアポートフォリオに綴じるなどをしていった。1年次から4年次にかけて記録用紙を記載し、記録用紙や資料などを蓄積し、就職活動へ繋げる工夫をしていた。

④ キャリアデザインシート

2年次において「私が学生時代に力を入れて取り組んだこと」や「私の目指す看護師像・働き方」を具体的に書けるようになることを支援していた。書けない場合には空白のままでもよいものとし、現状を認識することや残りの学修期間でより具体的に書けるようになることを支援していた。

⑤ 卒後教育

病院と大学が連携・協働し、看護職のキャリア開発や生涯学習を支援することや社会のニーズに合わせ、教育プログラムの開発や教育体制の整備を行うことなどにより、看護学生から院内外の看護職員のために看護実践教育を行っていた。

3) グループワーク（一部抜粋）

(1) 学生はどのようにキャリアデザインをつくり上げているか

- ・昔の方がビジョンのある学生が多かった。最近は、学生によって差がある。
- ・学生は、国試に合格し、看護師や保健師として就職するという漠然としたゴールを持つことが多い。
- ・学生は、ネームバリューで就職先を決めている。
- ・看護師に関心をもった時、中学生の看護師体験に参加した時、自分は看護師になりたいのかもしれないと気づいた時、様々なきっかけから自ら行動することが、キャリアデザインをつくりはじめる最初ではないか。

⇒学生は、職業を自分で決めた時点でキャリアデザインを形成し始めいくのではないかな。

看護の体験を重ねて、生きることとは何かとか、看護師とはどのような仕事なのかを知って、やっぱりこの仕事をしたいとかできないとか考え、ひとつひとつの能動的な行動が職業的アイデンティティの形成につながり、キャリアデザインをつくり上げている。

- ・(病院)奨学金を貸与することによってキャリアデザインを考えている。
- ・(実習などで)モデルとなる看護師や保健師を見つけると、こうなりたいというイメージがつく。
- ・学生にとっては、教員がモデルになることがある。

(2) 教員はどのように学生のキャリア形成を支援しているか

- ・学生は自分自身のことがわかっていないことが多いが、PROGやEQIを実施することにより、自身の苦手部分（課題、特性）に気づくことができている。
- ・学生から、就職するならどのようなところがいいのか、聞かれることがある。卒後教育

がしっかりしているところが良いのではないかとアドバイスすることがある。

- ・実習中に就職活動についてアドバイスをしている。
- ・助産師学校への進学イメージができるよう卒業生話を聴く機会を設けている。
- ・ボランティア活動への参加を促し、将来看護職としてどのように地域と繋がりたいかのイメージがもてるようにかかわっている。
- ・入学時から面談を行い、学生に今後どのようなプランをとりたいかを早めに聞くようにしている。
- ・ビジョンを持っていない学生には、様々なところで活躍する看護師を紹介するようにしている。
- ・1年次から4年次までのカリキュラムの中にキャリア形成支援が含まれている。

(3) 今後、教員はどのように学生のキャリア形成を支援していくことができるか

- ・早い段階で(1年次のうちから)学生が自身の苦手部分(課題、特性)に気づくようにする。
- ・1年次からジョハリの窓を使って、自己理解・他者理解を深め、キャリアデザインについて説明をする。
- ・学修の積み重ねがイメージできるようポートフォリオをつくる。
- ・最近、新3Kといわれている内容は、「教育、給与、休暇」である。卒後教育の体制ができているところを選択して、配属された場所で継続してほしい。看護師としての基本的な態度とどこに配属されても適応できる力をもつてほしい。そのためには、困難を乗り越える力、看護師を継続することができる力を身につけることが必要である。
- ・就職の面接で質問されることのひとつに、挫折した経験やストレスを感じたことの有無がある。挫折でもストレスでもそれを乗り越えることができるかどうか、つまり看護でも学修でも乗り越える力すなわち生きる力を備えているかを面接者はみている。教員が学生を支援するということは、学生が言葉にしなくても、挫折していることに気づいて、環境を整え、関係性を構築して、学生自身が能動的に行動することで乗り越えていけるように後押しすることにあるのではないか。

⇒学生のキャリア形成を支援する教員の役割とは、学生の挫折を意味づけることにあ
る。学生にとって嫌なこと、ストレスに感じていること、挫折した経験の意味づけを
することで、それらを乗り越え、生きていく力にできるように支援する。単に挫折し
た、ストレスを抱えただけで終わらせるのではなく、そこから学生自身が能動的に主
体的に行動することで成長できる支援をする。アドバイザーとして、学生の SOS に
気づいて、環境を整え、関係性を構築できるように支援することが大切である。

- ・早い時期からインターンシップや就職説明会への参加など、学生が自覚をもつことが重
要ではないか。
- ・1年生の時から卒業生との接点を持たせ、交流を図ることができれば、看護師像のイメ
ージを膨らませることができるのではないか。
⇒1年次からの卒業生との交流や実習でのロールモデルとの出会いで看護師像のイメ
ージを膨らませることができる環境を提供する。
- ・卒業生の声(どのようにキャリアを積んでいて、何に困ったかなど)を聴く機会をつく

る。

- ・学生同士が学年を超えた交流の機会をもつ（3年次生と1年次生が合同で実習をするなど）。
- ・卒業研究発表会に1～3年次生に参加してもらう。
- ・ボランティア活動に参加するきっかけをつくる。
- ・キャリア支援センターは全学共通のため、看護学科独自のキャリア支援（看護師のキャリア論）が必要。
- ・相談窓口になる。
- ・学生自身が面談ノートを作成し、面談記録を残していく。
- ・4年次でアドバイザーが変更になる際の情報共有ができると効果的（学生情報シートの活用など）。
- ・学部生と卒業生との交流の機会をつくる（領域単位での卒業研究発表会に卒業生を招くなど）。

6. 実施後アンケート結果 回答者数：11名 一部抜粋

1) 「本学のキャリア支援の現状と課題」について

- ・キャリア支援センターで実施している各学年への取り組みについて、自分が把握していなかった点も知ることができた。また、卒業生の声や内定の時期を知れたことで今何を学生が求めているのか、明確に知ることができた。
- ・本学の現状がデータとともにとても分かりやすく説明されていたため、とてもよかった。
- ・古い考えなので転職せず長く勤務することが良いと思っていたが、キャリアアップするための転職は良いことなど改めて思った。
- ・当大学のキャリア支援の活動や学生の就職活動の時期を理解することができた。今後、学生の就職支援のアドバイスに役立てていきたいと思う。
- ・内容はわかりやすかったが、重複箇所も多く、時間が超過してしまっているのが気になった。

2) 「他大学のキャリア支援の実践」について

- ・他大学では学生に対しどのような支援をしているのか知ることができた。本学に近い取り組みだけでなく、異なる取り組みもあることが分かり、まだまだできることがあるのだと感ずることができた。
- ・他大学の具体的な実践例が知ることができたため、よかった。
- ・提示された資料（キャリアデザインシート）は当大学でも活用できるのではないかと感ずった。
- ・文献からではありましたが、具体的な取り組みまで紹介してもらいわかりやすかった。
- ・他大学の具体的な取り組みをもう少し聞いてみたかった。限られた時間だったので仕方ないとは思った。

3) グループワークについて

- ・経験や領域が異なることで、様々な過去の事例や支援を知ることができた。そのおかげで今取り組んでいるキャリア支援の中でも特に継続したいことや具体的な提案が挙が

り、自己の振り返りにもなった。今後自分としてもできることは取り組んで参りたいと思う。

- ・先生方が学生の就活支援に関してどのように取り組んでいらっしやったのかを聞くことができた。事例を交えたお話も聞かせていただき、今後の参考になった。
- ・それぞれの先生方の考えを伺うことができて良かった。学生のキャリア支援は卒後だけでなく、看護師をめざした時から始まっているのだと改めて思った。
- ・もう少し検討する時間があると良かったと思う。
- ・（グループワークにおける）役割をあらかじめ決めておく必要があったのか疑問に思った。
- ・「キャリア」の意味が教員によりズレがあった気がする。まずは、「キャリア」や「キャリア支援」についての概念を示してもらったほうがズレなく話し合いができた気がする。
- ・「学生のキャリア形成」とは何をさすのか？定義をして、もう少し的を絞った方が、実際の本学科の教育に活かされる内容になったのではないかな。

4) 今年度の FD 研修の企画・運営について

- ・学科の FD なので全員参加することが前提だと思うが、だからこそ、日程の提示はもう少し早くお願いできればと思う。
- ・運営の先生方もグループワークに参加するとよいのではないかな。
- ・グループの発表は、時間も指定するとよかったと思った。グループによりばらつきがあったのでどのくらいという目安があったほうが良かった。
- ・この課題が授業改善とどのようにつながっているのか少々疑問に感じた。

5) 今後の看護学科 FD 研修について

- ・実習指導や実習評価について取り上げてほしい。
- ・シミュレーション教育や OSCE に関する内容がききたい。導入ししばらくたっているので学び直しや自己点検の意味も込めて、講義を聞いたりワークショップをしたりするなど学びを深めたい。

7. まとめ

今年度は、本学のキャリア支援の現状と課題および他大学のキャリア支援の実践を学び、学生のキャリア形成を支援するために教員としてできることは何かを考えることを目的に看護学科 FD 研修を行った。

「本学のキャリア支援の現状と課題」では、1 年次から 4 年次にかけてキャリア支援センターを通して細やかな支援がされていることが報告された。2024 年度の卒業生(83 名)の就職活動の概要を見ると、全体的に就職試験が早まる中、多くの学生が第一希望の機関で内定をいただくことができていますが、第二・第三・第四希望での機関で内定をいただく学生もいた。卒業生へのアンケート調査からは、在学中にキャリア形成やキャリアデザインについて学ぶことや卒業生や教員との交流の機会を求めていることが明らかになった。本学のキャリア支援に対して、3 年次後期の段階でアドバイザー教員と共に、今後の方向性を検討する機会の設定が必要と捉えられていた。

「他大学のキャリア支援の実践」では、近年、新人看護師および中堅看護師の離職の多さ

が問題視されていることから、看護基礎教育課程からキャリア形成の基盤づくりとなる教育的な介入をしていく必要があることが示された。実際に国内の看護系大学では、主体的にキャリアを形成できること、将来のキャリアデザインを設計できること、キャリアデザインを描く上で必要な自己理解を深めること、専門職業人としての態度や深い思考力を育成することなどを教育目標として、定期的なキャリアガイダンスやキャリアポートフォリオの活用、キャリアデザインシートの作成などの実践がされていることが明らかになった。

グループワークでは、様々な職位や領域の教員で各々の経験や考えを伝え合うことにより、学生はどのようにキャリアデザインをつくり上げており、教員はどのように学生のキャリア形成を支援しているかの現状を共有し、今後、教員はどのように学生のキャリア形成を支援していくことができるかを検討することができ、有意義な時間となった。看護学科では、次年度にはホームカミングデーも予定されている。本研修での学びや気づきを活かし、教員として学生のキャリア形成を支援していくことが望まれる。

今年度のFD研修の企画・運営を振り返ると、実施日程の決定を早期に行うこと、授業改善のための研修で取り上げるべき内容の検討を慎重に行うこと、研修当日の時間を効果的に使うこと、重要な用語の定義を明確にした上でグループワークを進めることなどが必要であった。また今後のFD研修では、実習指導や実習評価、シミュレーション演習やOSCEを取り上げてほしいという要望があった。次年度以降に繋げていきたい。

報告：眞崎由香

VIII 経営学部

【経営学科】

テーマ：『授業の改善』

【概要】講師：栗田佳代子氏（東京大学 大学総合教育研究センター）

日時：2025年3月11日（火）13:00～14:00

形式：オンライン

参加者：11名

【内容】

本研修は、授業改善に資するFD活動の一環として、アクティブラーニングおよび学習成果を重視した授業設計の考え方を共有し、各教員が自らの授業を見直し・改善する視点を獲得することを目的として企画・実施した。

本研修では、近年の高等教育を取り巻く環境変化を踏まえつつ、授業を「設計の問題」として捉える視点を中心に、以下の内容について講義および事例紹介が行われた。

1. 高等教育を取り巻く環境変化と授業改善の必要性

一方向的な知識伝達型授業のみでは学習成果が十分に得られにくくなっている現状を踏まえ、学生の主体的な学びを促す授業設計の重要性について説明された。

2. 学習成果を起点とした授業設計（バックワードデザイン）

学位授与方針（DP）・カリキュラム方針（CP）と各授業を接続することによって、「到達目標（学生が何ができるようになるか）」「評価方法」「授業内での学習活動」を整合的に設計する考え方について説明を受けた。

3. アクティブラーニングの位置づけと具体的手法

アクティブラーニングを目的化するのではなく、到達目標を達成するための手段として活用することの重要性を確認された。

4. 学習者のモチベーションを踏まえた授業設計

学生の学習行動を支える要因として、結果への期待や自己効力感といったモチベーションの構造を整理し、授業内での問いかけや支援の工夫が学習の質に与える影響についての説明を受けた。

5. まとめ

本研修を通じて、授業改善は、個々の工夫や経験則も重要であるが、到達目標・評価・学習活動を一体として設計することで体系的に行えることを参加全員で確認することが出来た。

今後は、本研修で得られた知見を各自の授業に反映させ、学生の学習成果の向上につなげていくことが期待される。

報告者：栗原正樹

IX 未来教養学環

平本学「授業改善委員会規程」第3条の4)により、2024年度に実施した未来教養学環の授業改善活動について、以下のとおりご報告いたします。

日 時：2024年11月19日 17:30～19:30

場 所：1201

参加者：専任教員8名

テーマ：

2026年度から開講する「未来教養プロジェクト演習Ⅰ～Ⅳ」および「インターンシップⅠ・Ⅱ」の授業内容の検討

1. 実施目的と概要：

未来教養学環は2024年度から開設された組織であり、2025年度以降から開講される授業が多くあり、それらの授業内容、および授業間の関連性などについて、具体的に検討する事項が山積された状況である。そこで、未来教養学環を最も特徴づける「未来教養プロジェクト演習Ⅰ～Ⅳ」および「インターンシップⅠ・Ⅱ」の授業内容について学環所属教員で検討するとともに、学環科目相互の関係を再度確認する機会をもって、2024年度のFDとする。

2. 研修内容：

本 FD では、2024 年度から開講された「未来教養概論」「未来教養基礎演習Ⅰ・Ⅱ」の授業内容を振り返るとともに、2025 年度以降に開講される「未来教養基礎演習Ⅲ・Ⅳ」「未来教養プロジェクト演習Ⅰ～Ⅳ」「インターンシップⅠ・Ⅱ」の授業内容について検討した。さらに、各科目間における教授内容の対応付けを行い、ディプロマポリシーと照らし合わせたカリキュラム構成であることも同時に確認した。本 FD によって、学環所属教員が、未来教養学環の学びの過程を共有することができたと考えられる。

報告者：佐々木隆宏